

公開シンポジウム

「分野横断的な研究手法から探る、近世大坂都市住民の生活・病気・死」

オーガナイザー:長岡朋人(青森公立大学)、大庭重信(大阪市文化財協会)

趣旨説明

大阪市文化財協会が2019・2020年度に発掘し、2022年3月に報告書を刊行した大阪市北区の大深町遺跡は、大坂七墓の一つである近世墓地の梅田墓にあたり、石垣で区画した墓地内から1700体を超える土葬埋葬が発見された。墓地内は石垣により細分され、北部の土葬累積域と南部の木棺墓域の間で埋葬方法や被葬者像に違いが見られた。文献記録では、市中で行き倒れた身元不明人や流行り病による死者を大穴に投げ込んだという記述があり、本遺跡の土葬累積域がそれにあたる可能性がある。大深町遺跡の発掘調査資料は、その規模や埋葬の多様性という点で近世から近代の初めの大坂の都市史、信仰・墓制史を雄弁に物語る第一級のものである。

形態学、古病理学、プロテオミクス分析、DNA分析、同位体生態学的分析、考古学、歴史学の研究者が分野横断的に大深町遺跡をテーマに集まり、堅実な資料の整理作業を進め、最先端の技術で分析を進めている。本シンポジウムの意義は2点ある。大深町遺跡の歴史的な背景を紐解くことと分野横断的な視点から進めている研究の新知見を紹介することである。分野横断的な連携体制による研究プロジェクトを紹介することで、近世都市大坂の理解を深める。近世大坂の理解を深めるために、生物考古学の研究者による出土人骨の研究結果とプロジェクトの紹介、歴史学の研究者による大坂の歴史的背景の講演、考古学の研究者による大深町遺跡の発掘とその成果、同位体生態学、プロテオミクス分析、DNA分析の研究者による近世大坂の都市住民の生老病死の復元により、近世都市大坂の実像に迫る。本シンポジウムは研究の経過の報告を行う。

大深町遺跡に対する社会の関心の高さは、発掘時の報道からも推察され、本シンポジウムは研究成果の社会発信の好機である。人文科学と自然科学の分野の垣根を超えた視点から、地域に根差した最近の研究結果を社会に発信する機会であり、江戸末期の大坂の都市住民の生活や病気との共存の歴史に迫る。

プログラム

演題1. 「分野横断的な研究手法から探る、近世大坂都市住民の生活・病気・死—出土人骨の調査概報—」

長岡朋人(青森公立大学)、藤澤珠織(青森中央学院大学)、飯田真理子(大阪市文化財協会)、福原瑤子(総合研究大学院大学)、大庭重信(大阪市文化財協会)

演題2. 「梅田墓(大深町遺跡)の発掘調査成果」

大庭重信(大阪市文化財協会)

演題3. 「文献史料に見る梅田墓所」

村上紀夫(奈良大学)

演題4. 「蔵骨器の墨書から考える梅田墓の性格」

豆谷浩之(大阪歴史博物館)

演題5. 「古代プロテオミクスから読み解く人々の営み」

福原瑤子(総合研究大学院大学)、澤藤りかい(総合研究大学院大学)、西内巧(金沢大学)、長岡朋人(青森公立大学)、藤澤珠織(青森中央学院大学)、葛谷匠(総合研究大学院大学)

演題6. 「古代分子が解き明かす過去の病気」

澤藤りかい(総合研究大学院大学)

コメンテーター:安芸早穂子(東京大学空間情報科学研究センター協力研究員、考古学復元イメージ制作、アートと考古学国際交流研究会代表)、中山なな(早稲田大学)

演題1. 「分野横断的な研究手法から探る、近世大坂都市住民の生活・病気・死 —出土人骨の調査概報—」

長岡朋人(青森公立大学)、藤澤珠織(青森中央学院大学)、飯田真理子(大阪市文化財協会)、
福原瑤子(総合研究大学院大学)、大庭重信(大阪市文化財協会)

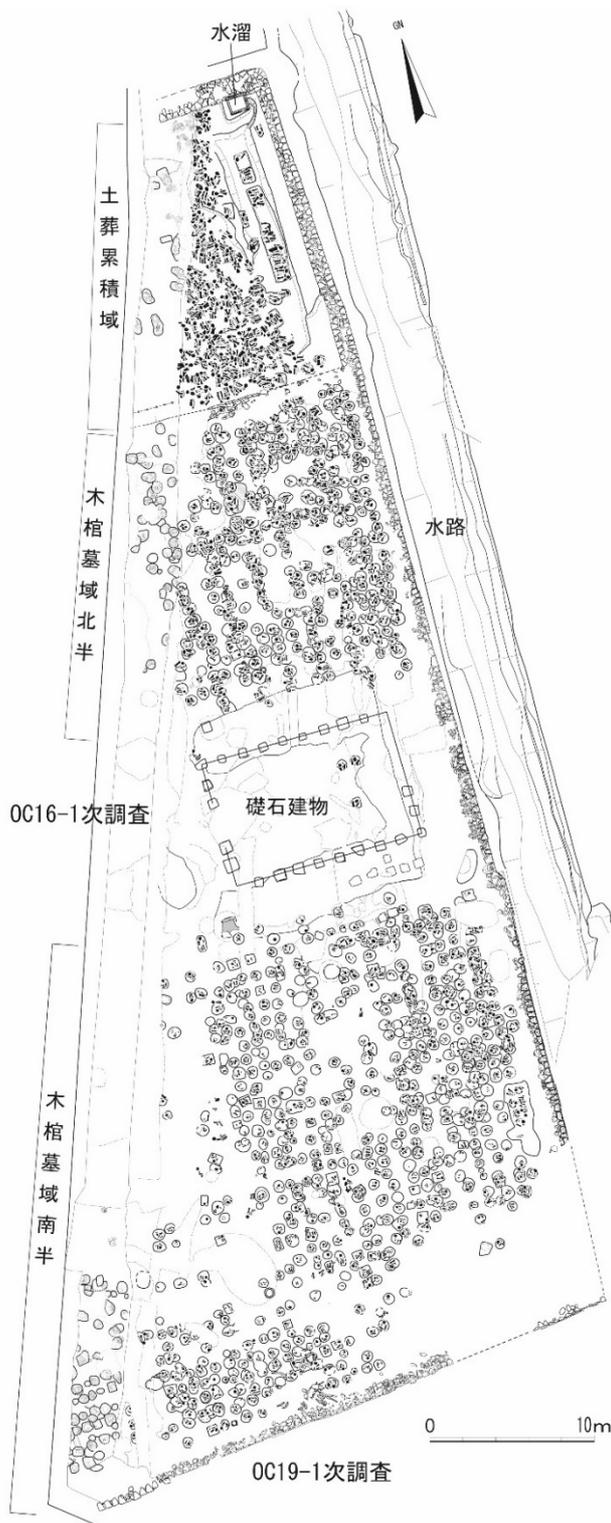
大阪市北区の大深町遺跡は、大坂七墓の一つである近世墓地の梅田墓にあたり、2019～2020年の発掘により、石垣で区画した墓地内から1700体を超える土葬埋葬が発見された。

2021年から人骨の整理と分析が開始し、2023年から科研プロジェクト「生物考古学創生:分野横断的手法から探る近世大坂の都市住民のライフヒストリーの構築」による調査・研究を進め、生物考古学と隣接領域が問題とするテーマへの方法論を洗練し、古人骨に基づいて過去の人類集団のライフヒストリーの実像に光を当てるとともに、都市化を切り口に感染症の流行等のグローバルなテーマに取り組み、人類史の画期におけるヒトのライフヒストリーの変化とそれに影響を与えた要因の解明に挑む。現在、大深町遺跡から出土した数万点～数十万点の出土人骨の整理と調査を行い、近世大坂の都市住民の生老病死に迫るべく、鋭意作業を進めている。

現時点で得られた成果として、出土人骨の個体数は頭蓋・歯から1318体、寛骨から734体であり、性比は男性に偏り、成人骨に比べて未成人骨の出土が1～2割であること、出土区域によって死亡年齢構成が異なることが明らかになった。本発表は、人文科学と自然科学の分野の垣根を超えた視点から、プロジェクトの紹介と経過の報告を行う。

演題2. 「梅田墓(大深町遺跡)の発掘調査成果」

大庭重信(大阪市文化財協会)



大阪市北区大深町の「うめきた」再開発に伴う発掘調査が2016・2019年度の二度にわたり行われ、近世大坂の共同墓地の一つである梅田墓の実態を考古学的に明らかにしえた。元々の梅田墓所の東側に19世紀中葉に新たに拡張造成され、約50年利用された墓地であり、調査では2000体近い土葬埋葬を確認した。北・南・東辺を石垣で区画された南北78m、東西34m以上の範囲で、内部はさらに石垣で南北に細分され、南半の早桶を用いた木棺墓を中心とした盛土されたエリア(木棺墓域)と北半の明確な埋葬施設を持たず火葬時に生じた骨灰層で埋められた一段低いエリア(土葬累積域)とに分かれていた(左図)。また、南部の木棺墓域は蔵骨器に納めた火葬骨の埋納域にも利用されていた。

木棺墓域と土葬累積域は埋葬方法や副葬品の有無等から被葬者の階層が異なっており、特に後者は文献記録にある市中で亡くなった身元不明者を埋葬した「大穴」に相当すると考えられる。かつ墓地造営初期には多数の遺体がまとめて埋葬されており、安政5(1858)年のコレラや文久2(1862)年の麻疹などの疫病による可能性が考えられる。近世大坂では火葬が中心で、今回の調査で見つかった土葬で埋葬された人の多くは都市の下層民と考えられるが、こうした人々の生活の実態を明らかにすることが今後の課題である。

演題3. 「文献史料に見る梅田墓所」

村上紀夫(奈良大学)

大坂七墓のひとつである梅田墓に関する文献史料に基づいた歴史研究は皆無に近い。発掘調査による知見とのすりあわせは今後の課題とし、本報告では、まず断片的な文献史料をできるだけ集め、そこから浮かび上がる梅田墓の姿を確認したい。

①梅田墓所の起源として、しばしば参照されてきた『大坂濫觴書一件』と『摂陽群談』のいずれもが、問題をほらみ、元禄の段階での理解にすぎない。

②近世に刊行された地図類に描かれた梅田三昧の表現から、施設内にはいくつかの恒常的な建物があったことがうかがえる。宝暦六年(一七五六)の絵図によると「ごくらくばし」、多くの建物が確認できる。かかれている。明和四年(一七六七)の都市騒擾の記録からは、梅田墓所に「座敷」「法華堂」「念仏堂」「乗物部屋」「焼香場」があったことがわかる。

③葬送の実態:梅田墓での葬送の実態を明確に示す史料は現時点では見いだせていない。天保八年(一八三七)の風聞では、天保の飢饉のさなかに扱われた死体が「梅田六千何人」とある。この史料から、梅田墓所での遺体処理数は、概ね千日前の埋火葬数の約半分程度と考えられる。千日前墓所については、埋火葬の数値がある程度確認できるので、梅田墓の実情も推計することが許されるかもしれない。



図『増脩改正攝州大阪地圖』文化3年(1806)刊(国立国会図書館デジタルコレクション) <https://dl.ndl.go.jp/pid/2541883>

演題4. 「蔵骨器の墨書から考える梅田墓の性格」

豆谷浩之(大阪歴史博物館)

近世大坂の「七墓」の一つに数えられる「梅田墓」跡で、再開発に伴う遺跡(大深町遺跡)の発掘調査が実施された。この発掘調査では、1700体を越える埋葬が確認され、JR大阪駅に近接する場所に、これほどの規模の墓地が存在したことが大いに注目されたところである。埋葬の大部分は土葬であったが、火葬骨を収めた蔵骨器も出土している。これらは、19世紀半ばに墓地が造成される以前に埋葬されていたものが中心で、造成後に埋葬されたものも一部含まれる。本報告は、これらの蔵骨器に記された墨書をもとに、梅田墓の性格を考えることを目的とする。

蔵骨器の墨書には、特段の決まりはないが、居住地・施主名・日付、という構成が基本形である(写真1)。このうち居住地(地名)からは、梅田墓にどのような人々が埋葬されたかを考える手掛かりとなる。報告書に掲載された蔵骨器118点のうち、記載された地名が判読できたものは69点である。地区別の内訳としては、大坂市中(三郷)36点、周辺村落33点でほぼ拮抗している(図1)。

三郷内の内訳は、堂島9点、中之島8点、西船場8点、天満4点、船場3点、曾根崎新地3点、上町1点である。堂島・中之島・西船場・曾根崎新地で8割弱を占めており、これらの地区が主体であったことがわかる。このうち中之島と西船場は17世紀前半、不堂島は17世紀末、曾根崎新地は18世紀初頭に開発され、それぞれ三郷に加えられた地区である。一方、周辺村落の内訳は、曾根崎村11点、下福島村10点、上福島村9点、中福島村2点、詳細不明の福島村1点で、地名は以上に限られる。福島村関係を合計すると23点となり、墨書の判読できた資料の1/3を占める。限られた資料ではあるが、以上から考えれば、梅田墓はもともと福島村・曾根崎村の共同墓地としての性格を持っており、近隣で17世紀以後に開発された地区の住民が埋葬される場合もあったということがうかがえる。

また、少数であるが、遠隔地の地名を記した蔵骨器も見られた。その中には「中嶋 肥後屋敷」と書かれたものがあり、おそらく中之島の熊本(肥後)藩蔵屋敷の関係者が埋葬されたものであろう。本来葬られるべき墓は国元にあるはずだが、不幸にして大坂で亡くなった場合、それを受け入れる場所が梅田墓であったという側面をうかがうことができる。

19世紀半ばに梅田墓が造成された後も、上記の性格は引き継がれていたようである。一方で増大する三郷の死者を埋葬する必要性から墓地が造成され、梅田墓に新たな性格が加わったということができないのではないだろうか。

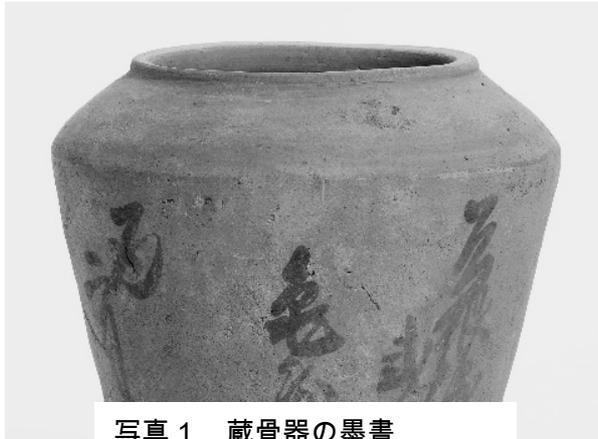


写真1 蔵骨器の墨書



図1 墨書に見える地名の位置

演題
5. 「
古代
プロ

テオミクスから読み解く人々の営み」

福原瑤子(総合研究大学院大学)、澤藤りかい(総合研究大学院大学)、西内巧(金沢大学)、長岡朋人(青森公立大学)、藤澤珠織(青森中央学院大学)、葛谷匠(総合研究大学院大学)

古代プロテオミクスとは、質量分析技術を用いて考古資料から過去のタンパク質を同定・解析する分野である。解析対象となる考古資料は骨や歯に加え、土器に付着した有機物や革製品などが挙げられる。これまでの先行研究では、数千の骨片に対する分類群の同定や、過去における人々の食性、病原タンパク質の検出が報告されている。古代プロテオミクスの技術を活用することで、現代を生きる私たちが、過去に生きた人々の生活を復元することができる。今回、近世大阪に埋葬された人々の営みを読み解くことを目的に、大深町OC19-1遺跡(梅田墓)出土人骨の歯に付着した歯石に着目した。歯石には数千年に渡り安定的に分子情報が保存されており、個人のライフヒストリーを反映する重要な情報源である。当時の人々が何を食べていたのか、さらにどのような口腔内細菌を保有したのかを明らかにするため、歯石を用いたプロテオーム解析を実施し、その結果を報告する。

演題6. 「古代分子が解き明かす過去の病気」

澤藤りかい(総合研究大学院大学)

人々が過去にどのような病気に罹っていたかは人類学における重要なテーマの一つであり、古病理学と呼ばれる一分野になっている。過去の病気に対するアプローチは様々であり、骨の形態学的分析だけでなく、古代DNAやタンパク質を用いた分析によっても過去の病気を明らかにできる場合がある。例えば梅毒、ペスト、ハンセン病、結核、マalaria、ヘルペスなど、様々な過去の感染症が古代分子によって分析されている。過去の感染症を調べることで、どのような感染症がいつどこで広がっていたか、またどのように広がっていったのか、病原性の変化などを知ることができる。

梅田墓においては、江戸時代の人口密度の高い都市部であり、梅毒・結核・コレラなど様々な感染症が流行していたと考えられる。特に梅毒は骨病変の分析から、梅毒の症状を呈するものが一定数存在していることが分かっており、この感染症が広まっていた様相が伺える。また1858年に流行したコレラのパンデミック（安政コレラ）と埋葬時期の一部が重なっており、このパンデミックの影響を受けている可能性も考えられる。

本発表では古代分子によって明らかになった過去の感染症の研究例を紹介すると共に、梅田墓における古代分子のプロジェクトの内容と、現在進行している分析について予備的な結果を紹介する。